

被災地 漫画でエール

両親を亡くした少年、放射能のバトン…

世界の漫画家たちは東日本大震災をどう見つめ、何を感じたのか。震災をテーマに描いた一コマ漫画を紹介する京都国際マンガ展特別展が、11日まで京都市左京区の市美術館別館で開かれている。犠牲者への追悼と復興へのエールを込め、世界各地から寄せられた約180点が並ぶ。

同マンガ展は2年に1度開かれ、本来は来年の予定だった。だが、震災が起き、主催の京都国際マンガ家会議が急きょ、特別展の開催を決定。「がんばれニッポン！」をスローガンに世界各地の漫画家に呼びかけると、41カ国から約300点が集まった。

作品には、津波に刀で立ち向かう侍や溶融する日の丸などが描かれ、震災や原発事故の衝撃の大きさを象徴的に表す。チェルノブイリ原発事故があったウクライナの漫

弱者に寄り添い、原発に警鐘

画家は、自国から日本へ放射能がバトンのように手渡される様子を描き、事故が繰り返されたことを痛烈に風刺する。インドネシアの漫画家は、津波で両親を亡くした少年の悲しみを伝えた。

自らも出品する京都国際マンガ家会議のジョン・インキョン事務局長は「一コマ漫画には、毒がないと面白くないので、人を励ますというテーマは難しい。でも、風刺漫画の原点は弱者に寄り添うこと。被災地に寄り添った世界の漫画家のメッセージを感じてほしい」と話す。一般400円、中高大生200円。入場料はすべて震災義援金として寄付する。

(深松真司)



①ジテット・コエスタナさん(インドネシア)の作品
②ドゥボブスキー・アレクサンダーさん(ウクライナ)の作品

